〔監修〕
小松左京／紀田順一郎

海野十三全集

三一書房

海野十三全集
第7巻　地球要塞（第8回配本）

1990年4月30日　第1版第1刷発行　Printed in Japan

監修者　小松左京
　　紀田順一郎
発行者　畠山滋
印刷所　日本写真印刷㈱
製本所　東京美術紙工
発行所　株式会社　三一書房
東京都文京区本郷2—11—3
電話 03(812) 3131～5番
振替東京 9-84160番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　© 1990年
ISBN4-380-90538-1

地球要塞・目次

地球要塞　5
二、〇〇〇年戦争　89
爆薬の花籠　129
未来の地下戦車長　247
見えざる敵　297
軍用鮫　307
特許多腕人間方式　317
什器破壊業事件　333

人造人間の秘密 351
新学期行進曲 375
氷河期の怪人 387
鬼仏洞事件 397
脳の中の麗人 415
暗号音盤事件 433
千年後の世界 447
解題〔會津信吾〕 457

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

地球要塞——海野十三全集・第7巻——

地球要塞（ちきゅうようさい）

怪放送――お化け地球事件とは？

西暦一九七〇年の夏――

折から私は、助手のオルガ姫をつれて、絶海の孤島クロクロ島にいた。

クロクロ島――というのは、いくら地図をさがしても、決して見つからないであろう。

クロクロ島の名を知っている者は、この広い世界中に、まず五人といないであろう。クロクロ島は、その当時、西経三十三度、南緯三十一度のところに、静かに横たわっていた。

そこは、地図のうえでみて、ざっと、南米ブラジルの首都リオを、南東へ一千三百キロほどいったところだった。

「その当時……横たわっていた」といういい方は、どうもへんないい方だ、と読者は思われるであろうが、決してへんないい方ではない。そのわけは、いずれだんだんと、おわかりになることであろう。

さて私は今、そのクロクロ島のことについて、自慢らしく読者に吹聴しようというのではない。私が今、ぜひとも、ここに記しておかなければならないと思うのは、或る夜、島のアンテナに感じた奇怪きわまる放送についてである。

その夜、私は例によって、只ひとり食事をすませると、古めかしい籐椅子を、崖のうえにうつした。

海原を越えてくる涼風は、熱っぽい膚のうえを吹いて、寒いほどであった。仰げば、夜空は気持よく晴れわたり、南十字星は、ダイヤモンドのようにうつくしく輝いて、わが頭上にあった。

私は、いささかわびしい気もちであった。

その気もちを、ぶち破ったのは、オルガ姫の疳高い悲鳴だった。

「あッ、大変、大変よ」

疳高い叫び声と同時にオルガ姫は、とぶように駈けてきた。

「どうした、オルガ姫！」

「怪放送がきこえていますのよ。六万MCのところなんですの」

姫は流暢な日本語で、早口に喋る。

「六万MC、するとこの間も、ちょっと聴えた怪放送だね。――録音器は、廻っているだろうね」

「ええ、始めから廻っています」

「ああ、よろしい。では、五分ほどたって、そっちへい

く」
姫は、にっこりとうなずいて、地下室へつづく階段の下り口の方へ、戻っていった。
六万MCの怪放送！
この怪放送をうまくとらえたのは、これで二度目だ。前回は、惜しくも目盛盤を合わせているうちに、消え去った。いずれそのうちまた放送されるものと思い、このたびは、自動調整に直しておき怪放送が入ると同時に、オルガ姫が活躍するようにしておいたのである。
さて今夜は、録音器が、どんな放送を捕えたであろうか。
私は、階段を下りていった。
オルガ姫は、録音テープを捲きとって、発声装置にかけているところであった。
私は、すぐ始めるように命じた。
モートルが動きだすと、壁の中にはめこんだ高声器から声がとびだした。
「――器械が捕えたものであって、時は西暦一九九九年九月九日十九標準時、発信者は、金星に棲むブブ博士……」
そこまでは、明瞭にきき取れたが、そのあとが、空電とおぼしきはげしい雑音のため、全く意味がとれなくなってしまった。私は、舌打をせずにいられなかった。
しかし聴取不能の時間は、わずか三十秒で終り、それから先は、またはっきり聴えだした。
「……ところが、昨夜の観測によると、地球の表面は一変してしまった。なによりも驚かされたことは、陸地の形がすっかり違ってしまったことである。
地球に特有な逆三角形の陸地の形は、どこにも見られなくなり、それから、こまかな海岸線も全く消失し、只有るのは、摑えどころのない、のっぺりした曲線で区切られた海岸線が見えるだけである。ことに、記憶すべきは、陸地の面積が、わが金星から見える範囲内でも、約五分の一消失してしまった。
まことにふしぎな地球の異変現象であるといわなければならない。この現象を、一括して吾れブブ博士の感じをいいあらわすならば、地球は、この三十年の間を、化けてしまった。すなわち『お化け地球事件』と呼びたい。
なぜ、地球はかくもふしぎな化け方をしたのであろうか。それは今後の研究に俟って、明らかになるであろう――これがブブ博士の報告である。
西暦一九九九年といえば、今から約三十年後のことである。果してわが地球は、そのころ、左様な異変を起すであろうか。もしそのような異変を起すものとせば、その原因は、如何なることであろうか。

金星のブブ博士でなくとも、われわれこの地球に棲んでいる者として、たいへん気になることである。もしやそれは、例の大陰謀……」

というところで、放送者の声は、惜しくもまた空電に遮られてしまった。その後は、ついに、聴くことができないでしまった。空電が消えたときには、その怪放送も、空間から消えていた。

汎米連邦――いよいよ第三次世界大戦か？

「お化け地球事件」をつたえた怪放送の謎！

私は、只ひとり苛々し、呻吟した。

その怪放送者は、何処の何者であるかわからないが、たしかに、この地球のうえの、どこかに棲んでいる者にちがいない。彼は、どうして、その「お化け地球事件」のことを知ったのであろうか。

いや、それは兎も角としても、もしその放送が、真実をつたえているものであるとしたら、地球は、今から三十年後に、たいへんな変り方をするわけである。

なぜ、そんなことが起るのであろうか。なぜ地球は、そんな風に化けるのであろうか。

これを報告したのは、金星のブブ博士であるという。博士は、三十年後に、地球の表面にあのような変化がおこることを予言したのである。

いや、予言ではない。博士は三十年後の、そのお化け地球を、はっきり見たというのである。

電信の文句の始めが、空電のため、邪魔をされて、文意がはっきりしないが、兎に角、三十年後のことがよく分る器械があるらしい。

察するところ、それは、ウェルズという科学小説家が空想したことのある「時間器械」というような種類のものであるかもしれない。これは油断のならぬ世の中になったものである。

私は、こうして考えているうちに、なんだかその怪放送者が、私の敵であるように思われて仕方がなかった。

つまり、その怪放送者は、自分のところにある「時間器械」らしいものを、ひけらかせ、そのうえ、われわれが現にこうして棲んでいる地球が、三十年後には、不思議なる変り方をするんだぞと、われわれを嚇しているのだ。

全く、夢のようにふしぎな話だ。「三十年先が分る器械」のことにしろ、「お化け地球」のことにしろ、どっちも、われわれの想像を越えた話である。

そういう話をもちだして放送するとは、われわれを嚇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

すことを目当てにやったものに、ちがいない。いよいよ油断のならないのは、その怪放送者である。
私は、沈思黙考すること一時間あまり、ついに肚をきめるに至った。
（よオし、たとえいかなる犠牲を払おうとも、怪放送者の正体をつきとめないではおかないぞ！）
私は、オルガ姫に命じて、再び怪放送を自動的に受信する装置を、仕掛けておくように命じた。
それがすむと、私は、自ら秘密中継送信機の前に立ってまず真空管に火を点じた。
その大きな硝子球は、器械囲いの中で、ぼーっと明るくなった。異状なしである。私は、送信機全体に、スイッチを入れた。そして、マイクを手にとったのである。
「やあ、久慈君か。こっちは私だが、なにか変った話はないか」
「おお、お待ち申していました。たいへんなことを、聞きこんだのです。いよいよ汎米連邦は戦争を決意したそうです。連邦の最高委員長ワイベルト大統領は、今から一時間ほど前に、極秘のうちに、動員令に署名を終ったそうです」
「そうか。とうとう、開戦か」
「そうです。またまた世界戦争にまで発展することは、火をみるより明らかです。ああ、今度はじまれば、実に第三次の世界大戦ですからね」
と、久慈のこえは、興奮のあまり、慄えを帯びている。
「一体、汎米連邦には、一切の戦備ができ上っているのかね」
と、私はたずねた。
「もちろんですとも。この二十幾年、汎米連邦は、ばかばかしいほど大仕掛けの戦備をととのえているのです。近来汎米人以外のいかなる外国人も、入国を許可しませんから従って、どんなに大仕掛けの戦備ができているか、あまり外へは、洩れないのです。しかし、こうして、国内に居る者には、たえず目にふれています。全くばかばかしいの一語につきますよ。
旧北米合衆国のワシントン州のごときは州全体が、一つの要塞のように見えるのです。欧弗同盟国にとっては、相当手強い敵ですよ」
大西洋をはさんで、東に欧弗同盟国、西に汎米連邦――この二つの国家群は、二十余年以来睨み合いをつづけているのであった。
「そうか。今度は、いよいよ本当に始まるのか」
私は、眩暈に似たものを感じた。いよいよ大戦争だ。そして、待ちに待っていた機会は、ついに来たのである。

「おお、今、知らせが入りました。――ああ、いけません。この通信が、軍の方向探知隊によって発見されたらしいです。うむ、たしかにこの家を狙っているのだ。監察隊が、サイレンを鳴らしつつ、オートバイに乗って、表通りへ練りこんできました。いや、裏通りにも、サイレンが鳴っている。さあ、たいへんだ……」

私は、おどろいた。心臓がとまったかと思った。ぐずぐずはしていられない。

「おい、久慈、最後の始末をして、すぐ地下道へ逃げろ」

「はい。――おや、地下道もだめです。機銃と毒瓦斯弾をもった監察隊員が、テレビジョンの送像器の前を、うろうろしています。ああ、困った。仕方がない、あれを使います」

「あれを使うか。――いよいよ仕方がなくなったときにつかえ。できるなら、使うな」

「そっちは、大丈夫ですか。この調子では、そっちへも、監察隊が、重爆撃機にのって、急行するかもしれませんですよ」

「こっちのことは、心配するな」

「あッ、来ました。もうだめだ。どうか気をつけてください！」

久慈の、悲痛なる叫びごえは、そこではたと杜絶えた。通信機の前を彼が離れたのであった。

黄いろい煙――怖るべし超溶解弾

久慈が、ワシントンの監察隊によって襲撃されたのだ！

汎米連邦からは、一人の外国人も余さず追放されたのに、久慈は、大胆にも、ひそかにワシントンの或る場所に、停っていたのである。私の無電通信が、運わるく、警備軍のために発見されてしまった。彼は果して、無事に逃げ終せるであろうか。私は、胸に新たな痛みをおぼえた。

高声器が、がくがくと、ひどい雑音をたてた。

「おや、まだ、向うのマイクは、生きているな！」

と、私は、思わず目をみはった。

とたんに、高声器の中から、久慈ではない別人の声がとびだした。

「おや、誰もいない。たしかに、この部屋の中に怪しい奴がいたんだが……」

「おかしいなあ。逃げられるわけはないのですがねえ」

と、これは、また別のこえだった。

久慈は、監察隊の眼から、のがれているらしい。どこにひそんでいるのか、それともうまく逃げ終せたのか。
「もっと探せ。おや、その書棚のうしろが、おかしいぞ。黄いろい煙が出ている。やっ、くさい！」
「書棚のうしろですか。よろしい、書棚をのけてみましょう」
二人のこえが、遠のいた。
数秒後、二人の驚いたこえが、再び高声器の中に入ってきた。
「あっ、ここから逃げたんだ。鉄筋コンクリートの壁に、こんな大きな穴が開いている。これは、今開けた穴だ。それにしては、この黄いろい煙がへんだ。合点がいかない」
「わかったわかった。もっと奥の方の壁に、穴を開けているんだ。よオし、二人して、とび込もう」
「待て！　とびこむのは、あぶない。この穴の開け方は尋常でない。相手はたいへん強力な利器をもっているぞ。とびこんではあぶない」
「だが、もう一息というところだ。では、自分が入る！」
「よせ、あぶないぞ」
「なあに、これしきのこと！」
「あっ、とびこんでしまった！」
と、穴の開き方に、疑いをもらしていた一人の監察隊員は、絶望の叫びをあげた。
それから、更に数分後――
「おっ、この煙は何だ。やや彼奴の声らしい。ただならぬ声だ。さては、やられたか。――おお、そこに足が見える。待て、今、ひっぱり出してやる。うーんと……」
残った隊員は、力を入れて、同僚の足をとって、穴から曳きだす様子！
「ややッこれは……。首が、とけてしまった！　やっぱりそうだ。これはたいへん。噂にきいた超溶解弾を使っているらしい。これは危い、すぐ本隊へ知らせなくては……」
隊員の声が、引込むと、とたんに、高声器が割れたかと思うほどの、ひどい雑音がとび出し、そのまま高声器は鳴らなくなってしまった。
私は、深い溜息をついた。
（久慈の奴、ついに超溶解弾を使ったか。使ったのはいいが、一切の証拠を、あそこに残してこなければいいが……）
私は、心配であった。
だが、いくらこっちで、心配をしてみても、向うのことが、どうなるものでもなかった。私は、一切をあきらめるしかなかった。

私は、スイッチを切った。そしてまた階段をのぼって、夜空の下に立った。
美しい夜だ。
星明りばかりで、他に、なんの灯火も見えない。視界のうちには、人工的な一切の光が、存在しないのであった。そしてこのクロクロ島のうえでは、自然はかくも美しいのであった。
光ばかりではない。音さえない。
浪の音さえ、聞えないのである。この島では、打ちよせる浪の音は、たくみに、補助動力に使われ、そして音を消してあった。だから、時折、頬のあたりをかすめる微風が、蜜蜂の囁くような音をたてるばかりだった。——この島では、光と音と、そして電磁波とが、すこぶる鋭敏に検出されるようになっていた。——
かく物語る私とは、何者であろうか？
名乗るべきほどの人物でもないが、もう暫く、読者の想像に委せておこう。

哨戒艦隊——テレビジョンに映った影

時間は流れた。
クロクロ島の夜は、いたく更け過ぎて、夜光時計は、今や二十一時を指している。
待っている第三回目の怪放送は、まだアンテナに引懸らないらしい。オルガ姫は、ずっと下に入りきりで報告に上ってこないのであった。
いつもなら、もう疾くの昔にベッドに入る頃だが、今宵は、なかなか睡られそうもない。
久慈から聞いた遂に汎米連邦に動員令が出たとの飛報は、私を強く興奮させてしまった。なかなかベッドに入るどころではない。首を巡らせば、今オリオン星座が、水平線下に没しつつある。私は、暫く、星の世界の俘虜となっていた。
階段を駈けあがってくる足音が聞えた。
オルガ姫だ。
（さては、遂に、第三回目の怪放送が、キャッチされたか）
と、私は、古びた籐椅子から、体を起した。
やっぱり、それはオルガ姫だった。
「大至急、下へお下りになってください。この方面へ、怪しい艦艇が近づいてまいります」
「なに、怪しい艦艇が……」
このクロクロ島のあるところは、各種の航路をさけた安全地帯なのである。ところが今、怪しい艦艇が近づき

つつありと、オルガ姫は、報告してきたのであった。
怪しい艦艇とは、いずくの国のものぞ。
その詮議はあとまわしだ。今は、なには兎もあれ、待避しなければならない。私は、椅子から腰をあげた。
「姫、籐椅子を、下にもってきてくれ」
「はあ」
「それから、後を頼むぞ」
「はい」
私は階段を、駈け下った。
つづいて、オルガ姫が椅子を持って、階段を駈け下りてきたと思うと、彼女はその足ですぐ配電盤のところへ、とんでいった。
複雑なスイッチが、つぎつぎに入れられた。赤や白や緑やの、色とりどりのパイロット・ランプが、点いたり消えたりした。防音壁をとおして、隣室の機械室に廻っている廻転機のスピード・アップ音が、かすかに聞える。
私たちの体は、なんの衝動も感じなかったけれど、深度計の指針は、ぐんぐん右へ廻りだした。
室内の空気の臭いが、すっかりちがってきた、薬品くさい。もちろん、それは濾過層を一杯にうずめている薬品の臭いであった。
「三隻よりなる哨戒艦隊、東四十度、三万メートル！」
オルガ姫は、すきとおる声で、近づく艦艇を測量した結果を、報告した。
「どこの国の艦だか分らないか」
「艦籍不明！」
と、オルガ姫は、すぐに応えた。
「艦籍不明か。どうせ汎米連邦の艦隊だろうが、なんの用があって、こっちへ出動したのかな」
まさか、このクロクロ島が見つかったためではあるまい。
だが、先刻、久慈は、私に向って警告した。
（この調子では、そっちへも、監察隊が重爆撃機に乗って急行するかもしれませんよ！）
という意味のことを云った。今、近づいてくるのは、哨戒艦であって、重爆撃機ではないから、話はちとちがう。といって、もちろん、安心はならない。
「二万メートル！」
と、オルガ姫が叫んだ。私は、哨戒艦との距離二万メートルの声を待っていたのだ。
「おお、そうか。では――テレビジョン、点け！　吸音器開け！」
私は、命令した。
壁間に、ぽッと四角な窓があいた。窓ではない、テレビジョンの映写幕である。静かな海面、すこし弯曲した

水平線、そして、そのうえに、ぽつぽつと浮かぶ三つの黒点――それこそ、近づく三隻の哨戒艦であった。このテレビジョンは、赤外線を受けているので、映写された夜景は、まるで昼間の景色と同様に明るく見えるのだった。

その横では、吸音器が、はたらきだした。ざざざーッと、いそがしそうに鳴るのは、全速力の哨戒艦が、後へ曳く波浪のざわめきであろう。

映写幕のうえの艦影は、刻々に大きくなってくる。

その三点の黒影は、ぽつぽつぽつと並んでいたと思うと、しばらくすると、どっちからともなく寄って一緒になってしまう。そしてまた暫くすると、離れる。そのとき、一番艦が、左から右へ移り替る。――艦隊は、ジグザク行進をつづけているのだ。

私は、この様子を、じっと眺めていたが、艦隊が、わがクロクロ島の方位を、完全におさえていることを知った。一体、どこで、うまく見当をつけられてしまったのであろうか。

「こいつは、油断がならないぞ！」

私は、万一の用意をした。

そのうちに、艦影は、映写幕一杯になった。4と記した赤灯が、ふっと消えて、その隣りの3と書いた赤灯が点いた。映写幕上の艦影は、とたんに小さくなった。

が、こんどは、艦影は、どんどん大きくなっていった。赤灯は2が点き、遂に1が点いた。そのころ吸音器から、ぼそぼそと、人の話ごえが聞えてきた。

「一番艦の艦橋のこえを採れ！」

私は、号令をかけた。

オルガ姫は、どこの国の機関部員にも負けない敏捷さでもって、しきりに目盛を合わせた。――吸音器からのこえが、急に大きく、明瞭になってきた。

「司令、たしかにこの方位にちがいないのですがなあ」

と、アメリカ訛りのある英語が！

クロクロ島の秘密
――驚くべし十万トンの怪物

さすがの私も、その話ごえを耳にしたときには、背筋がすーっと、寒くなった。

（ふん、やっぱり、そうだったか。汎米連邦の軍艦だな）

艦の位置は、今や、ほぼクロクロ島の真上にあるのだ！

「先任参謀、測量班へもう一度、注意をうながせ」

「はい」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo